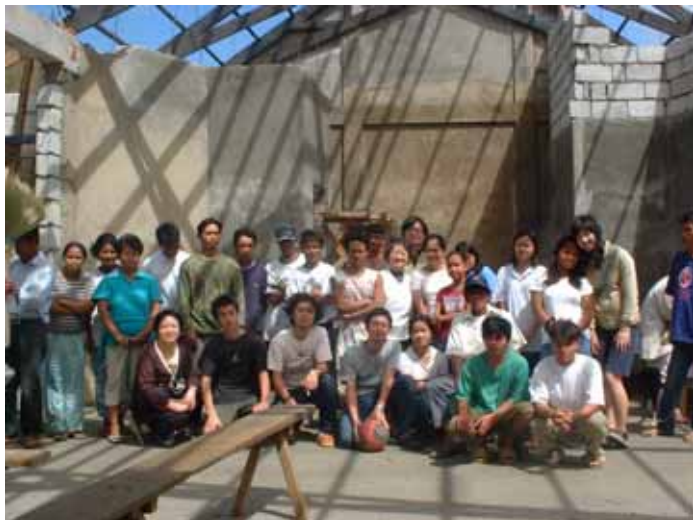


フィリピンとの掛け橋

第7号 日本聖公会九州教区宣教局フィリピン協働委員会発行

2005年4月11日

ワークキャンプ特集



3月6日(日)礼拝後記念撮影

今年は教区から7名を派遣

九州教区は、協働関係にあるフィリピン中央教区へ、昨年に続いて、3月1日(火)～8日(火)、7名を派遣して、同教区サン・イシロに建設中のセントジェームス教会のペンキ塗りを中心としたワークキャンプが行われた。教区報5月号にも概略は報告されるが、参加者の感想文や詳しい日程、写真などを掲載して、我々参加者の体験を教区の皆さんと分かち合いたいと思う。

参加者 小林史明司祭(団長・熊本聖三一教会牧師)

(以下五十音順) 家入貴裕(福岡教会) 市来梢(福岡教会) 佐藤遼(佐賀祈りの家) 野田晃助(大牟田聖マリア教会) 簗田智佐子(福岡ベテル教会) 簗田紘子(福岡ベテル教会)

キャンプ日程

3月1日・火

午前10時10分福岡空港発、中華航空で台湾乗換え、午後3時50分(現地時間・日本より1時間遅れている)マニラ空港着。夜、レストランで歓迎夕食会。教区事務所近くのコンテンポラリーホテルに宿泊。

2日・水

ホテルで朝食後、教区事務所で荷物を積み込んで、車で約2時間。昨年のキャンプ地コギオ近くを通過して、キャンプ地サン・イシロに到着。午後からペンキ塗り作業開始。夜は歓迎会。現地での4泊はジェームズさんの家。

3日・木

午前中ペンキ塗り作業。昼食後男は近くの滝のあるプールへ行く。午後ペンキ塗り。

4日・金

朝、教会へ行くとタクロバオ主教や教区職員の人たちが来ている。午前中は小学校で凧作りや、折り紙。歌や踊りの交歓会。午後は、ペンキ塗りや、礼拝堂の床のセメント塗り準備の鉄筋棒作業。

5日・土

ペンキ塗りのあと金鉱掘りの現場を見る。携帯電話の届く村の端の峠まで連れて行ってもらい、全員無事なことを福岡へ連絡する。夕方は村の人たちと一緒に礼拝堂の床にセメントを打つ作業。夜は遅くまで送別会。

6日・日

朝、日曜学校でまた凧揚げをしたあと、新しい礼拝堂で初めての礼拝。礼拝の中で記念品交換。マニラへ向かう途中でコギオのセントグレゴリー教会訪問。昼食はマニラで、ケンタッキーフライドチキンのランチ。夜は中央教区の青年たちと交歓会。その後ネッド司祭の案内で、青年参加者4人は屋台へ繰り出す。簗田智佐子姉はシャワールームでトラブル。

7日・月

朝食後、サンチャゴ要塞やカトリックマニラ大聖堂を見学する。ハリソンプラザで昼食、買い物。ネッド司祭宅に招かれ、サンイシロや、来年のキャンプ候補地インファンタなどの写真を見、ビデオCDをいただく。夜、反省・送別会で、ひとりひとり感想を述べる。そして各参加者に感謝状や記念品をいただく。一緒に夕食。

8日・火

朝食後、午前10時45分マニラ空港発、中華航空で台湾乗換え、午後7時20分福岡空港着。

目次

参加者の感想文

フィリピンキャンプ2005を終えて	小林史明	2
開戦前夜	家入貴裕	3
フィリピンに住む人達の絆	市来梢	4
フィリピンワークキャンプのレポート	佐藤遼	5
第二次フィリピン滞在記	野田晃助	6
フィリピンに触れて	簗田智佐子	8
フィリピンワークキャンプに参加して	簗田紘子	10
(事務所職員)リンさんからのメール		11
キャンプ地紹介		12
今後の展望とお知らせ		13

フィリピンキャンプ2005を終えて

フィリピン協働委員長 司祭 フランシス 小林史明

1年ぶりにフィリピンへ行き、顔なじみの人々と再会したり、新しい発見をするなど、大変多くの収穫を得て、今年のワークキャンプも終わった。2年続けて我々の受け入れを担当してくれた、ネッド司祭から、来年は彼の担当しているもう一つの町、インファンタ(マニラから2時間で行けるルソン島の東側の海岸にある町)でのワークの提案も出てきて、両方の教区にとっても年中行事になりつつある。フィリピン中央教区のスタッフのひとりで、歓迎会も送別会も指導してくれたのは教育担当者のシャロンさんだったが、彼女の夫シルベスター・ダグソン執事が、今年の9月に2週間の予定でやってくる。

そんな流れの中に居て、プログラムを消化するために、フィリピン中央教区のリンさんとメールのやりとりをするのが、私の仕事になっているが、それだけでいいのだろうか、と最近思うようになった。

帰る前日、ハリソン・プラザのナショナルブックショップに立ち寄り、「フィリピンの神話と伝説」という本を買った。話を集めた編集者が、こんなことを書いていた。

「わたしたちの神話や伝説は急速に姿を消している。わたしたちが西洋世界のおとぎ話の方を嗜好するために、わたしたちはこれらの話を失っているのだ。もしわたしたちがこれらの話の喪失を許してしまうなら、それはわたしたち自身からだけでなく、子どもたちや次の世代から真実を奪うことになるのである。スペインがやってき

て、わたしたちの土地を奪い、人々を奴隷にしてわたしたちの文化を壊してしまう前までは、フィリピンには豊かな文化と遺産があった。わたしたちには、過去の植民地支配の暴力と痛みの歴史を変えることはできないが、あなたの子どものため、あなたの心の中にあなたのフィリピンの文化と遺産についての真実を探して、見つけてくださるように、そして文化と遺産を誇ることを学び、それを守るようお願いする。」

この前書きに、私は衝撃を受けた。フィリピン中央教区との交流を通して、わたしたちが目指しているものを、この本から示されたように思ったのである。イゴロット族でありながら、子どもたちは、英語とタガログ語を話す環境に育っている。そこで、部族の伝統を伝えるために、イゴロット語の歌を教えてくれた。私たちも日本人として、日本の歌を用意したり、凧揚げや折り紙、お手玉、紙芝居などを通して交流を図った。そうするうちに、お手玉の時に歌っていたという「青葉茂れる桜井の」という楠正成の歌に出会うことになった。これには、天皇制擁護の思想が見られて、多少抵抗もあるが、日本の伝統を学ぶことにもなった。

聖公会の良さは、画一的な中央集権制ではなく、各国、地域の特色を尊重することである。ところが、知らず知らずのうちに、独自性を失い、西洋風、聖公会の場合はイギリス風になってしまう偏りを感じている。今回買った「フィリピンの神話と伝説」は、そのような私たちの生き方に警鐘を鳴らすもの、と受け止めた。

私は、フィリピンとの協働の仕事をするひとつのしるしとして、何とかこの本を訳して、フィリピンの良き文化と遺産を紹介することができたら、と思っている。

このような交流を通して、それぞれの伝統文化の中にある、豊かな多様性を感謝し、喜び合える関わりが続くことを願っている。



礼拝説教 右はタガログ語に通訳のネッド司祭

開戦前夜

福岡教会 家入貴裕

ほぼ一日半寝ていない。しかし疲労感は其れ程感じない。ひたすら心地良い、体が溶けていく様だ。只、たおやかに緩やかに静かに呼吸を紡ぐ。やがて精神が補完され完了する。

誰の論理かは覚えていないが、此の世界は一秒間に74回の明滅を繰り返しているそうだ。今の自分が正にそうであり、日常の一瞬一瞬に此の眼で見据えたものが散りばめられ、記憶とリンクし、意識体が拡大。己自身の存在確認作業に於いて自信が拡大。オーバードライブ過剰。時速100kmを越えた瞬間から始まるバイク上でのトランス状態にも似た感覚。ここ数年の記憶が広げられ、その何処かしらに自らを立ち置き、俯瞰し、言葉を吐く。誰に対してでもなくそれらを自らに問い、その答えは自らに帰属し、行き詰まる。その中で己は今此処に在り。それが全ての始まりと終局であると悟る。自らが存在を認めない限り自身は現実に存在出来ない。そして、その「認める」と云う作業は、到底一人個人では成し得ない事である。第三者の関与があって、初めて前に進み出すのである。年月を経て何時しかそれは自信と言う物に昇華される。

人は他人に対しては自信を見せつける事がしばしば容易に出来る。何かの裏返しのように。しかし何故、その対象が自分自身に及ぶと静かに黙り込むのだろう。

今回のフィリピンワーク、それは自分自身に対しての何かしらの挑発行為であった。初めてのホームステイと云う環境の中で、ほぼ初見とでも言うべき彼らの生活スタイルの中で、自分はどれほどなのだと。彼らと共に生活する中で、物事全てを対象とした理解は拡大するだろうか。

思うに、理解すると言う事はそれ其の物を咀嚼し、己の体内に取り込み含有する事だ。俺の中にも細かく砕かれた感情、思考等が無造作に座している事だろう。考えてみると、自分の中に理解にとても似ている感覚がある。記憶探した。記憶を感知すれば映像化される。その源を有しているからこそ出来る行為だ。思い出すという行為は、断片たちをもう一度探し出し構築することだ。しかし、そこに別の想いや感情が入り込むと、その記憶は何時の間にか妄想へと変化する、とても脆弱な物だ。自分を取り巻く様々な状況に左右される。それを好まない俺は、別の記憶装置、脳内では無い何か、頭が働くよりも早く反応する第六感覚に記録する事を必要とした。

ロックンロール主義者の俺がエイトビートを耳にした瞬間、手を打つ様に。そのコードの和音を瞬時に聞き探るように。考えるよりも早く反応する感覚を欲した。常に俺は頭よりも体で感じたいと願ってきた。それらは勿論、思考できる脳があるからこそ出来ることでは在るが、皮膚感覚によって感じたかった。我の眼、手、足、髪、全身で見、感じ取った物こそが真実に成る。そう思った。クラシック、普遍的な物を手に入れたかった。それには日本であることが災いする。此処には全てがある。しかし、裏を返せば何もないのと同義だ。余計な物が多すぎた。雑多な事ばかりに日々が費やされ、考える時間も持てない。何時しか感覚も閉塞して行く。こればかりは我慢が成らなかった。決して失ってはならない物の様な気がした。あの地に行くとその思い出せる。何物にも替え難い大切な場所だ。今年も再び訪れることが出来、何かを取り戻せた。自分への挑発行為に思えたそれは、結果的に失くしていく物への焦燥だったのかもしれない。又、それらを抱えて日々を過す事できっと何かを手に来出来るだろうと考えている。

実際、フィリピンでの生活は非日常であった。しかし、その体験は俺の其処彼処に、日常の中の残像として、輝きを放ち続ける。常に持っていたい。言葉では表し尽せないそれをいつ何時も持ち続けたい。

出来ることならば来期も又、此の作業に参加する事を希望したい。あらゆる手段を尽くしてでも行く意味を俺は見出している。

その来るべき時迄この俺が存在していますように。祈りを込めて。Peace。



セメント作業中の家入貴裕兄

「フィリピンに住む人達の絆」

プリスカ 市来梢

フィリピンに滞在した八日間、想像を超えた毎日がそこにはありました。

私が今回参加した理由は、一年前にフィリピンの劇団「PETA」のワークショップに参加し、フィリピンという国が見てみたいと思ったからです。

フィリピンのマニラに着くと、すぐにホテルまで移動していました。プリキのようなバスに、クラクションが鳴りやまない程慌ただしく走る車。大きな看板。物売っている人。目に入ってくる物が全て新鮮で、私はずっと窓から目を離せませんでした。

次の朝、サン・イシロに出発。

サン・イシロまでは何時間かかかり、私はマニラの町並みを見ながら、いつの間にか寝ていました。次に目を覚ました時は、あまりの景色の変化にちょっと驚きました。赤土に囲まれた風景に、木々や、土と葉で作られた家。あのにぎやかなマニラとはうって変わった景色です。

何も知らない私は、後からテレビなどで気づいたのですが、フィリピンは海が有名なんです。でも、綺麗なのは海だけじゃないんですね。

サン・イシロに近づくほど、山道はどんどん激しくなっています。魚が泳ぐ水たまり(小川?)の中を走った時はちょっと怖かったです。

でもそんな道になっていくほど、景色も自然でいっぱいになっていきます。

空の広がる丘が見えて、丘には所々に湖ができています。ポツンポツンと見える家畜の動物や家。きっと絵画にしたら綺麗な絵になっているだろうなあと考えながらやっぱり釘付けになっていました。

私たちがお手伝いする教会を見た時、私はやる気でいっぱいになりました。

それは建物よりも、そこで働いている人達をみてそんな気持ちになったのです。

そしてそれは、日を重ねるごとに強くなっていきました。

私たちが手伝ったのはトタン屋根の色塗りでした。私はただひたすら、塗っていた気がします。仕事に関しては、男の子達は力仕事も手伝っていたけど、私は色塗りだけだったし、ホームステイ先でも進んで手伝う事ができなかった。

だから夢中になって塗ったのは、そんな自分がちょっと悔しかったからだったかもしれません。

けれど、そんな思いとは裏腹に現地の人達の触れあい

は素敵な時間だった。特に夜ご飯前の集まりは本当に貴重だったと思っています。

あの夜でサン・イシロの人達の絆が見えたとし、その中に仲間入りできた事が感激で、言葉の壁もいつの間にか消えていました。

日本も昔は「ご近所づきあい」があったんですよね。今は便利になりすぎて、人との交流も便利になってしまっていて、フィリピンの人達の絆を見たからこそ少し寂しい気持ちになりました。そして、本当の人との関わり合いに触れ合った気がして嬉しかった。私の中で大きな糧になると思います。

それだけじゃありません。サン・イシロの人達がいいなあって思ったのは、仕事は仕事、休憩は休憩ときっちり分けているところでした。

日本みたいに休憩の時も誰かが仕事をしているのではなく、休憩になったらみんなで一気に休む。そして、その休み方もたっぷり感があって気が抜けた。

飲み物や、お菓子が必ず用意されていて働いた人だけではなく、子供や女の人達も一緒に食べたりして・・・。

いいなあー。サン・イシロ。本当に素敵な場所です。ホームステイでもジェームスさん一家が私たちの世話をしてくれていました。

正直最初は、気を遣わせすぎじゃないかなって思うくらい、距離を感じていたのですが、私の場合ジェームスさんの家にいた「ナミ」という少女を通じてみんなとその距離を縮めていったと思います。

最後の日は本当に切なかった。実は帰りの車の中でずっと泣いていました。

今だから言えるんですけど。いや、書くつもりもなかったんですけど。

でもそのくらいサン・イシロの体験は大事な物になったのです。サン・イシロの人達、サン・イシロの村、風景全てに感謝しています。

私はカタコトの英語しかできなかったけど、サン・イシロで過ごした日々があったから、自分から英語に挑戦しようと思ったし、今もメールで文通する友人もできたと思っています。

ってということで、今度はマニラでの出来事を書きたいと思います。マニラでは青年の交流会が最高でした。テンションとか、ノリとか、フィリピンのオープンな国を思わせる人柄が楽しい時間を過ごさせてくれました。

卓球やダンスや歌。言葉のいらぬ交流がやっぱりありました。今でも交流会で踊った歌とダンスは覚えています。

でも、やっぱり英語がわからなくてとても悔しい思いも
しましたけど・・・。

いっぱい話してくれても、結局は「わからない！」とい
うしかない自分。歯痒くてたまりませんでした。

そこで出会った「ベニー」という女の子ととても仲好
しになって、メールで文通する友人とはこの子のことな
のです。ギターがとてもうまくて、将来は牧師さんにな
りたいとか。英語が出来ていればきっともっと深い話が
できていたかと思うと、また悔しいです。「日本人なん
だからいらない」って馬鹿な事を言ってないで真面目に
受けておけばよかったな。

最後の夜は私たちのお世話をずっとしてくれたネッ
ドさんの家を訪ねた後、大人の人達の交流がありました。
ネッドさんはユニークな人で、とっても気配り上手な人
でした。

そしてたくさんの思いがけない贈り物と、ネッドさん
からの言葉をもらって

なんだか私の方がたくさんお礼を言いたいくらいで、胸
がいっぱいになりました。最初の海外旅行がこの旅でよ
かったなあって思いました。

そして最後に、一緒に旅をした日本のメンバーにも、
私は感謝の気持ちでいっぱいです。みなさんから、いろ
んな処でいろんな刺激を受けました。とにかく、私にと
っているんな人から何かしらもらってばかりの毎日で、
初めての経験もとにかく数え切れないほどありました。
こんな刺激たっぷりの旅はこの先どれだけあるでしょ
うか。バカンスではないけれど、バカンスよりも、リフ
レッシュできると思いました。

フィリピンの旅は、私に人との関わりのあり方を教え
てくれた、大事な旅です。もっといろんな人にこんな素
敵な経験をしてほしいと思いました。



作業休憩中の市来梢姉

フィリピンワークキャンプのレポート

佐藤遼

本当の豊かさとはなんだろうか。今回ワークキャンプ
に行ったときにそのことについて初めて真剣に考えた。

ワークキャンプ地のサン・イシロは首都マニラから車
で悪路をひた走り、2時間くらいの場所にある。万年寝
ぼすけの僕は当然のごとく移動中の車の中でも寝てし
まうので、マニラを出発してサン・イシロに到着したと
きは何百年も昔の世界にタイムスリップした感覚に襲
われた。マニラでのもっぱらの交通手段はといえば車、
バイクだが、ここサン・イシロではそのような文明の機
器はほとんど無く、徒歩、又は水牛であり、照明器具は
電気ではなく灯油ランプなのである。文明機器に囲まれ
て育ってきた現代人にとってサン・イシロの住人の移動
するのにも時間がかかり、電気も無い生活というのは貧
しい生活だと感じるのではないだろうか。現に僕はサン
・イシロについたときに日本での自分の生活との違い
に驚いた。

しかし、その村で生活していくうちに本当に豊かな生
活をしているのは、私とこの村の人達どちらなのだろう
かと考えるようになった。例えば、食べ物について言う
と、庭で飼っている鶏、アヒルや豚を自分たちの手で捌
き、子供たちはそれを見て、手伝い、食べ物というのが
どのようにして自分たちの食卓にたどり着くのかとい
うことを直に知ることができる。今、日本では鶏がどの
ような姿、形をしているか知らず、鶏、豚と言ったらス
ーパーに並べてあるトレーに入った鶏肉、豚肉しか知ら
ないと言う子供さえいるのに、自分達の食べ物がいかに
して食べ物になるのかの工程を身近で知ることができ
るというのは本当に幸せなことだ。また、私たちも作業
の合間に行ったが、暑くなれば近くに川があるのでそこ
に飛び込んで汗を流すことが気軽にできる。日本では、
水質が悪いし、危ないからと、泳ぐにはプールに行くし
かない。のびのびと生活するとはこういうことを言うの
かと気付かせてくれた。今、日本でスローライフという
生活スタイルが人気を集めているがそれをもっとも忠
実に実践しているのがサン・イシロの人々であった。

その人々の中で私が思ったことのひとつは教会の役
割が本当にわかりやすく、素敵な形で人々の中に溶け込
んでいると感じたことだ。

村には多くの人々が住んでいるが、1軒1軒の間の距
離がかなりあって、皆が集まり、話をして、笑いあっ
たりして、村の中の絆を深める機会というものがない

ベントがない限り難しいのだが教会の礼拝がそのイベントの1つとして存在している気がした。今回、九州教区のワークキャンプで建設を手伝った教会も、神の言葉を聞く場所としての教会でもあるが、村の人たちの交流の場としての教会であり、皆で楽しく聖歌を歌い、お喋りをするという心の豊かさ、人間関係を育む教会になるに違いない。そんなすばらしい教会建設に少しでも貢献できたことをうれしく思う。



作業休憩中に何かポーズをとっている佐藤遼兄

青年たちとの記念撮影



3月6日(日)夜、教区センターのホールで青年たちとの交歓会記念写真。右端が教育担当者のシャロンさん。左端が教区事務所の財政担当者リンさん。

第二次フィリピン滞在記

野田 晃助

正直、私は今回のワークキャンプに参加するつもりはなかった。というのは私は去年も参加したわけだし、なによりも志望者が多いと思ったから私は彼らに譲るつもりでいた。去年のキャンプから、私はより多くの人に経験してもらいたいと願っていたのだが、実際はみんな忙しいのか参加者はそれほど多くなかった。

「え？二度目行っているの？マジで！？ラッキー、ホホーイ！」

そう言ってすかさず申込書を書いた所要時間はおそらく二十秒を切っていただろう。それにしてもこんなアツいイベントに二度も行っているのだろうか。今回迷って来なかった人は来年こそ思い切って行って欲しい。さて、前置きが長くなったが、さすがに二度目なので前の晩や福岡空港でのことは省略させてもらう。あえて言うなら中華航空の機内食で「肉か？魚か？」と聞く必要はあるのか、いや多分ないな。

一年ぶりのフィリピンは変わらず暑かった。マニラ空港で迎えを待っている時も不安は微塵もなく、また来れた嬉しさと懐かしさでいっぱいだった。しばらくして迎えに来たネッドはちょっと太っただろうが、私達は再会を喜び合った。

その日はむこうの教区事務所の人々と夕食をとり、ホテルで休んだ。個人的にはホテルより去年寝泊まりしたホレブハウスの方が居心地がよかった。現地で知り合った青年達が気軽に遊びに来れる場所だったからだ。来年は是非またホレブハウスでお願いしたい。

次の日は目的地サンイシロへ移動するとのことだった。ネッドの運転する車でどれくらい走っただろう。それまでの街並みから徐々に緑が多くなり、ついには舗装されていない道になっていた。野を越え山を越え、小川まで越えた。まるでダカールラリーだ。「ガードレールって何だっけ？」。ありゃあ4WDじゃないと無理だな。サンイシロのセント・ジェームス教会は実に立派なものだった。まだ建設途中とは言っても、想像した5,6倍の大きさに驚いた。我々のペンキ作業も大変そうだ。教会をみた後、私達はホームステイ先へ。主人はジェームスさん。この男がシブいのなんのって、彼の前では仲代達矢や高倉健もかすんでしまう。

この日の午後を含め4日間、作業したわけだが前半はペンキ塗り。建物がデカイと屋根もデカイ。塗ったのはトタンだったが枚数が枚数だけに膨大な量を塗装した。

ここでもやはり昼間に休憩をとった。どうやらこれがフィリピンスタイルらしい。雨が降る日は作業ができなかった。なんだか申し訳ない思いだった。ペンキ塗りが終わると教会の床に針金で鉄の棒を敷いた。これが鉄筋となるらしい。私はストレスが貯まっていた。比較的楽な作業ばかりだったので体力を持って余っていたからだ。しかしそれは作業最終日に見事に解消されることになる。我々に最後に任された仕事、セメント運び。セメントと砂利と水をシャベルで混ぜ合わせ、容器に入れて運んだ。リヤカーもないのですべて人力。腕が悲鳴をあげた。とくに限界なんて超えている。私ははるばるフィリピンまで働きに来て、現地の人々の足手まといになりたくない思い一心だった。

その翌日、自分達が造った床のうえでの礼拝は清々しいものだった。私は去年のコギオでの礼拝を思い出していた。この気持ちはとても文面には表すことができない。サンイシロを離れた我々はマニラに戻りホテルに二泊し帰路についた。そのあいだに観光もした。補足だが、サンイシロにいた間も仕事ばかりしていたわけじゃない。ネッドがなにかと連れ出してくれたから退屈なんて感じなかった。ゴールドラッシュ跡、泳ぎに行った川は幻想的だった。マニラの夜のドライブも楽しかった。毎晩酒を飲みながらギターで歌い、テーブルを囲んでチェスをした。言葉は違って感じることは一緒だ。みんながそれぞれ楽しく交流していた。ここでそれらについて詳しくレポートしてもよいのだが私の作文能力ではどうしてもリアリティに欠けるようだ。それにこの倍は長くなってしまう。冒頭でも述べたが、もしこのレポートを読んで少しでもフィリピンに興味を持ったなら、我々は来年あなたの参加を待っている。私は喜んで席を譲ろう。あとは自分で行動し経験してほしい。きっと今までの価値観が変わることだろう。

一週間という短い期間だったが、今では色褪せてペンキに汚れた私のジーンズが何も隠さず物語っている。今回もまた忘れられない思い出となった。

最後に、もし本当に神が存在し、彼がこのような機会を与えてくれたのなら、今回のワークキャンプに関わった全ての人達と同様に、神にも感謝しよう。

THANK YOU VERY MUCH!

P.S. ネッドのアニキと俺達が揃えば無敵さ！！



村の人とセメントを運ぶ野田晃助兄



建築中のセントジェームズ教会の前の養田智佐子姉



現在も掘っている金鉱 1グラム1000円になる

フィリピンにふれて

福岡ベテル教会(伝道所)箕田智佐子

3月1日～3月8日フィリピンに行くことになった私は、その日が近づくにしたがい、行くと言ったものの不安のほうが大きくなり、初めての渡航は「恐く」私には未知の世界だった。私くらいの年齢の人はそうだと思うのだけど、暑さ、食事、自分の健康、何もかもが心配のもとだった。勿論ワークキャンプも初めてである。しかしフィリピンには懐かしさがあり、あたたかさがあった。

サン・イシロはとても良い所だった。

マニラからは2時間位の所にあり、途中コギオを横に見ながらの道のりである。去年行った人たちがコギオの事を“懐かしい”と連発していた。電気も無ければ水道も無い。食事をしていると足元に犬や、猫がやってくる。そればかりではない。大きさの違う5羽のひよこを連れてたにわとりが2組、子豚も2匹放し飼いにされていた。大人の豚は小屋に入られている。雄鶏は足をつなげられていた。何とも言えないのどかさ、私は、子供のころの懐かしさを覚えていた。

サン・イシロの自然がすばらしいのは言うまでもないが、姉や私は言葉がまったくダメで何も話せないのに、それでも一生懸命に話しかけてくる。最後はいくらあつかましい私でも、さすがに気の毒になってしまったほどである。

「もう少し勉強してくればよかった…」そう思わずにはいられなかった。

子供の教育も実にすばらしいものだった。夕飯は毎日夜7:30頃だったのだが、私たちが、ひと通りお皿に盛るまでは絶対にテーブルのところには近寄らない。泣く子さえいないのだ。遅い夕食だからお腹もすいているだろうに…と、つい、声をかけたくなるのを私はじっとがまんをしていた。

私たちの食事のために、鶏が消え、豚が消えた。アヒルが2羽一緒に消えたこともある。心づくしのもてなし、その、一生懸命さに私はいつも心の内で感謝の祈りをささげていた。

男の子たちも、「全部食べなきゃな…」と神妙な顔で言っている。ボランティアで行ったつもりだったのに、こんなにたくさんの食べ物をとりあげて…「私たちは本当に役に立っているの」？「ただじゃまをしにきただけではないの」？

胸が締め付けられる思いだった。

ネッド司祭はとてもステキな人だった。毎日私たちのために心をくだき、水や懐中電灯など足りないものを次々に用意し、仕事の教え方もユーモラスで楽しかった。彼のおかげで私たちは仕事をすぐ理解し、日常生活も不自由なく送ることができた。やさしくて、頼もしい先生だった。

仕事は主にペンキ塗りだった。4m×1m(41枚のトタンの波板1枚につき、5回八ヶで塗る。1度目は水で薄めた油成分除去剤を塗り、2度目と3度目は防錆の塗料、4度目と5度目が本塗りである。女性は終始ペンキ塗りだったが、男性は礼拝堂の床作りのための砂利運びや生コンづくり、敷いた砂利を重い木槌で固めたり生コンを運んだりと結構「力仕事」も加わっていた。

土曜日の夜、サン・イシロの人たちとの手作りの送別会、形式ばったものではない。私たちは用意してきた聖歌を歌い“カゴメカゴメ”の変形をした。

簡単さが受けたのかサン・イシロの女性たちは大喜びだった。2～3回するうちに子供たちも加わってかなりにぎやかなものとなった。

外ではギターのリクエストがあっている。途中から私たちも参加。楽しさにだれも席を立つ人がいない。見たこともないような星空の中、ろうそくならぬ灯油あかりの下でそれは夜遅くまで行なわれた。

日曜日の朝、前の日に床をセメントで塗ったばかりの教会で聖餐式が行われた。

出席者が何と50人近くもいるだろうか。大人と子供が半分ずつで人が多いのに驚いてしまった。特に子供が多いのがうれしかった。

屋根はまだ取り付けられてはいなかったが、梁を通して見える青空のすばらしかったこと。空に浮かぶ雲までが新鮮に見えた。小林司祭の説教、ネッド司祭の声が空に響く。

小学校の先生に文房具の贈呈式もあって聖餐式が終わった。

朝、凧揚げに興じたばかりの子供達までが心なしか真剣な顔をしている。住所を交換し合う。肩を抱き合い、思わず涙する人もいた。

マニラに帰る途中、ファーザーネッドがスターアップルという果物をみんなに買ってくれた。名前はりんごだけれど、実はイチジクに似ている。半分に割って中を食べるのだという。とてもおいしい。マンゴー(土地の人

達はミンゴと言う)やパパイア、グアバなども一番おいしい“食べごろ”を食べることができる。中の実が黄色のバナナは見るのも初めてだった。さすが常夏の国!! やさしい甘さでほんとに美味。去年のワークキャンプであるコギオに寄ってきた。

セント・グレゴリーチャーチに塀ができ、教会として施設が整いつつあるのを見るのはやはりうれしい。サン・イシロ(セント・ジェームス・チャーチ)は4月3日が祝別式の予定だとか、私の脳裏に別れてきたばかりのエビリン・ナナとジェシカの顔が浮かぶ。

マニラに帰ると緊張する時間が待っていた。

日曜の夜、青年との交流である。若い人たちはこれが待ち遠しいらしい。シャローンさん(教区教育担当者)とチェイス君との絶妙のコンビによる自己紹介やゲームが始まった。

相手も7人こちらも7人の楽しい時間。罰ゲームまであって何をさせられるか気が許せない。私には彼らの名前すら聞き取れない。楽しいのだけど、一番ドキドキした“怖い?”時間だった。

月曜日は観光とショッピングである。サンチャゴの要塞に行き、マニラ大聖堂を見た。

サン・オウガスチン教会は世界遺産だそうだ。400百年位前に作られたその教会は、さすがに貫禄があった。マニラ大聖堂の方は第2次世界大戦で一度壊れ今の建物は復元なのとか。ステンドグラスがとても美しい。サン・オウガスチン教会は休みで深く入ることは出来なかったが、近くに行けただけでとても幸せだった。

ハリソンプラザというところで昼食をとり、買い物を楽しんだ。マニラの街では、セブンイレブン、ミニストップ、マクドナルド、ケンタッキーを見ることが出来た。このあたりは世界はどこも一緒らしい。違うといえば、入口に銃を持ったガードマンがいたことだ。テロの警戒のためだろう。これも、時代か。

教会に帰ると送別会をしてくれた。タクロバオ主教ご夫妻、ファーザーネッド、シャローン、他、計8人である。少しゲームなどをして、持っていった楽譜で聖歌などを歌い、一人一人に感謝状が渡された。2月の教区大会記念のTシャツをいただき手作りのショールやほうき(サン・イシロから)などもいただいて土産がたくさん!!

男性には毛糸の帽子が贈られていた。Tシャツにはエピスコパル(フィリピン中央教区)のマークが入ってい

た。思わぬプレゼントにみんな大喜びである。

すべてが順調、事故も無く、怪我も無く、あとは日本に帰るだけ...のはずだった。

しかし、私には他の人にもない失敗がある。風呂で足がすべりガラスのドアを割ったのだ。日曜の夜、マニラに帰って来ての出来事である。大きな一枚ドアのガラスだった。打った頭の痛みよりも弁償の値段の方が気になったくらいである。輸入物だろうしホテルのガラスだからきっと高級なものだろうし...どうしよう...ショボン...カードでなければ払えないかもしれない...

青年たちとの交流の後の楽しさも一度に消えて、すべての元気が割れたガラスに吸い取られてしまった。あ~あ...心配で生きた心地がしなかった。しかし、結果はノープロブレム!!だった。すぐには信じられなかった。エッ?ほんとにいいのですか?と何度も聞いた。言い尽くせぬ感謝だった。日本人ばかりの旅行者ならそうはならなかっただろう。交渉してくれた2人の先生のおかげだった。牧師という立場が相手に好印象を与えたのかも知れない。しかも、一人はフィリピンの人だし...とにかく、おかげでみんなと一緒に私は日本に帰れることになった。

帰りたくもあり、帰りたくもなし、乗り継ぎの台北で早くもくしゃみ続出。

「一難去ってまた一難」そんな気分だった。

「フィリピンはいいネ!!花粉がなくて...」欲張りの私の悩み(愚痴)は尽きることが無い。

あーあ日本が怖い!!



鉄筋留め作業中の左から野田兄、簗田紘子姉そして簗田智佐子姉

フィリピン・ワークキャンプに参加して

福岡ベテル教会 簀田紘子

3月1日から8日間フィリピンワークキャンプに参加しました。

行く前から水のこと、気候面など、とても心配でした。一同午前8時福岡空港集合、五十嵐主教、純子夫人、濱生司祭、佐山兄が、見送りに来られました。出発前全員集合、五十嵐主教のお祈り、飛行機は、china air line 福岡から台北へ、台北よりマニラまで、飛行機の中でも常に心の中で旅の無事を祈っていました。

マニラ空港に到着して、小林司祭がお迎えの方に連絡され、日本女性の原さん、フィリピン聖公会の女性ラティさんが来られ、私たち女性3人と小林司祭は、ホリオさん運転の車で、青年男性3人はネッド司祭運転の車で約1時間、コンテンポラリィホテルへ行きました。途中道路はとても混雑していて、特にジブニー(小型バス?)にはびっくりしました。窓はあってもガラスのない、後部のドアのない(開け放し)車の内部は、多分暑くて排気ガスいっぱいでしょう。ホテルに着きチェックインし、一休みした後、再び歓迎会のため迎えに来られ、レストランへ行きました。通されたそこには、タクロバオ主教、ジュリエット夫人、ネッド司祭、リンさん、シャロンさん、ラティさん、ホリオさんの七名、ことに嬉しかったのは、タクロバオ夫妻に再会出来たことです。去年の夏、日本に来られた時、五十嵐主教が、ご夫妻をベテルにも案内されていたので、会った時は嬉しく、懐かしく喜びで感激しました。

翌朝8:30ホテルを出て約2時間、私たちのワークキャンプ地のサンイシロ、そこには建築中の教会がありました。名前はセント、ジェームス教会とのことでした。兎に角、車で荷物をホームステイ先の、ジェームスさんの家まで運んでもらい、家の中にいれてもらいました。下は土間になっていて、テーブルの上に、食パンと瓶入りチーズ、スプライト、コーラが出され、お昼ご飯だと思って食べました。一休みし、しばらくすると「ごはん」と呼ばれたので、さっきのは、おやつだったのかと思いました。テーブルの上に、大皿に盛られたご飯が二つ、おかずが二種類、夫々サジがつけてあって、バイキングでした。食事の時に驚いたのは2~3匹の犬と1匹の猫が、私たちが食べている所で欲しそうに見ているのです。私は犬や猫が苦手なので、“移動”しながら食べました。食事が済んでいよいよワークヘジェームス宅より、山道

を歩いて10分、途中、小さな溝には、竹3本の橋、有刺鉄線をくぐり、次は有刺鉄線を股ぎ、最後は張られた針金の下を潜っていった先が現場です。

はじめの作業は、トタン板の油成分除去剤を、水で薄めた物をハケで塗りました。それが乾いてから、錆止めの茶色のペンキ塗り、ワーク第一日目でした。

電気が来ていないので、夕食はランプの明かりで食べ、外に出ると夜空の星は格別にきれいでした。夜はとても寒く、部屋は板張りで3畳か4畳でビニールシートにシート、掛ける物もうすいカバーで痛くて寒くて眠れず、おまけに真っ暗で、目をつぶったり、あけたり、全く一緒なのは初めての体験でした。

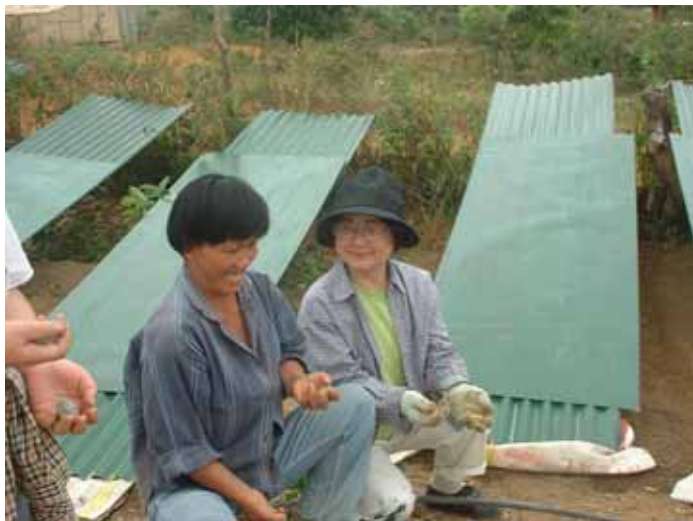
3月3日、午前午後、ペンキ塗り。ペンキが無くなったので帰る。3月4日、未だペンキが届いていなかったもので、子供たちに用紙に絵を描いてもらい、たこ作り、凧揚げ、少し雨が降り出したので、折り紙やふりつきの歌で交流をもった。昼からは礼拝堂の床のコンクリートをするための、縦横に30センチ位間隔に、針金を締め付ける作業をしました。

3月5日、ゴールドラッシュで昔、サガダから来られたという場所に連れて行ってもらいました、そこで現在も7~8人が掘っておられジェームスさんが砂に混じた小さな2個の金を持ってきて、見せてくれました。その後女性は、ペンキ塗り、男性は、小石や生コンを礼拝堂に、夜は送別会でした。仕事を終えた人たちもいれて総勢40人位、特にジェシカの母エビリンは、歌を唄ったり、ギターを弾いたり、多才能には感心しました。この方の表情がとても、真剣で辛くなるくらい私の胸に伝わってきて印象的でした。

3月6日礼拝前、前回と違う年齢の子供たちとの交流会、凧作りお手玉などで、交流を持ち、聖餐式は、昨日コンクリートされた、ベンチも簡単なものが4個、立ったままの人もいました、コピーされた薄い祈祷書は、タガログ語で書いてあります。可笑しかったのは、小林司祭が、お土産で持ってこられた、小さな日本酒の空き箱が献金箱になっていたことです。

礼拝後、サンイシロの人たちと別れを惜しんで、車に乗り、一時間行ったところで、去年のワークキャンプの、コギオのセントグレゴリー教会を見せてもらい、ケソン市の教区センター経由で14時30分ごろ、コンテンポラリィホテルに帰って来ました。夕方は青年との交流会、アクションつきの自己紹介や、歌や、簡単なダンス、私は付いてゆけませんでした。そこに出されたご馳走、殊にバナナがおいしかった。

3月7日、朝食後観光、サンチャゴ要塞、マニラ大聖堂、サン・オウガスチン教会を見てデパート、ハリソン・プラザで昼食、おいしかった。2階の一角に、カトリック系の礼拝堂があった。いろいろ、ゆっくり見て回った。帰りにネッド司祭宅で、サンイシロの写真のCDを見せてもらい、コーヒーやポップコーンなどご馳走になった。また、去年のホテルのホレブハウスや、アンデレ神学校の礼拝堂も見せてもらった。一度ホテルまで送ってもらって、18時過ぎの送別会兼交流会では、若い人たちは、この旅の感想を英語で、私と妹は日本語で、小林司祭に通訳してもらった。ノアの箱舟の紙芝居、歌など、またタクロバオ主教から、一人ひとり感謝状が手渡され感激しました。また、男性には手編みの帽子、女性には手編みのショール、全員にTシャツも戴きました。今回、私たちは七人、七色の虹の色、日本とフィリピンとの虹の橋です。



村のエピリンさんとお手玉指導中の簀田紘子姉



反省会で記念品をもらい、記念撮影

リン（教区事務所財政担当者）のメール

オハヨウゴザイマス！あなたからのメールをいただいて、私たちはうれしく思っています。

私たちも、直に、皆さんと出会い、働き、友情を深められて、幸せです。

ここに来て、みなさんの紙の作品を残してくださったこと（注：紙芝居や凧揚げ、折り紙、歌集などのことを言っているのでしょう）そしてここフィリピンで私たちと交流の働きをしてくださったことを感謝します。次の年には、皆さん全員とお会いし、もし可能ならもっと多くの参加者がありますように、願っています。

ネッド司祭とマーク（建築家）は、今日午後、サンイシロのセント・ジェームスへ帰る予定です。私たちは、皆さんからの挨拶をその会衆に伝えておきます。

それではみなさんによろしく。

リン・バギウェット

Ohayoo gozaimasu! We are happy to hear from you. We too, are happy to have met, worked and fellowshiped in person. Thank you for coming and leaving your paperworks and for some, their work in exchange of being with us here in the Philippines.

We hope to see all of you, if possible, and more campers in the next years.

Fr Ned and Marc is scheduled to go back to St James, San Ysiro this afternoon.

We'll have your greetings sent to the congregation.

Our warm regards.

Lynn Baguiwet



そこに彼らの農場と家がある。主教がダグソンとパラテスという二人の執事と訪問したある日は、帰りには山の上で夜になってしまった。暗闇の用意をせず、足を取られてからは、どろんこの山を降りるのに、本当に這って歩き、道のほとんどを転がらなければならなかった。幸い、骨は折らなかった。5000平方メートルの土地が2000年、ついに35000ペソで教会に購入された。うまくいけば、近い将来教会の建物が建つだろう。2001年に、サン・イシロは、アンティポロの聖グレゴリー教会の講義所になり、ネッド・T・マバンドル司祭の下にある。

キャンプ地紹介

* 2004年キャンプ地コギオ

聖グレゴリー伝道所 バランガイ サンルイス アンティポロ

この地の宣教は、トマス・マッデラ師による、メトロ・シーの何かのエキュメニカル宣教により、バランガイホール近くの小屋のような構えで、1991年に始まった。出席者は、しかしながら、司祭の不定期の訪問を取りやめるまでに、少なくなってきた。

その地域の聖公会信徒は、しかしながら、主教にしきりに誰かを送るよう要請した。そして、1997年、新しく赴任したネッド・マバンドル執事のもとで、会衆が形成された。事務員や運営委員会が組織された。彼らはまた、聖グレゴリー(3月12日が記念日)を守護聖人に選び、3月14日、この地域の伝道活動の復活を祝った。

最近の調査では、58人のメンバーが、ネッド・ティモシー・マバンドル司祭と、インノセント・オケケ司祭博士とアウロラ・カマンガ伝道師とが活動している。

* 2005年キャンプ地サンイシロ

サン・イシロ講義所 サン・イシロ アンティポロ

サン・イシロからの聖公会員のグループが1999年、サンタ・イネスを訪ねた時、シルベスター・ダグソン執事に、彼らを訪問するように招待した。彼は、ポテンガン主教が彼と共に訪ねるまで、朝の礼拝を続け、1999年の終わりに、最初の聖餐式と6名の子どもが洗礼を受けた。ダグソン執事は、朝の礼拝と聖餐式前半部分を彼らのために続けている。

サン・イシロへ行くには、雨の季節は、サンタ・イネスから山の上まで約3キロ登って、次に同じ山の反対側に3キロ下って、谷間を約4キロ歩かなければならない。

* 2006年候補地インファンタ

インファンタ伝道所 インファンタ ケソン

ジョエル・チャベスという若い男性が、聖霊刷新運動のグループの支援によって、アンドリュー・サクイアブ司祭から聖書学校へ送られ、1998年、教区の福音伝道者になり、ケソン州のインファントとその周辺の責任を持った。彼とガウデンシオ・ディマ克蘭ガンという先住民のための国家委員会 NCIP(昔の北部の文化共同体事務所)の長がある日、教区事務所にやってきて、その地域の文化的共同体であるドウマガッツのための特別な奉仕をしてほしい、という要望をした。この働きは、ONCC(今はNCIP)との協働の業になるかもしれない。従って、次のような、この地域での協働の聖餐式が始められることになった。ここでの活動は、

1. 医療宣教
2. 集団結婚式の協働(結婚登録をしていない人々が多く、権利を行使できないので、結婚登録を教会が代行し、式も挙げる活動)

この地域の最初の聖公会の聖餐式は、NCIPの部族ホールで行われ、後にインファンタのディマ克蘭ガン氏の家に移って、今日に至っている。2002年8月にディマ克蘭ガン氏が死んでも、チャベス氏も2000年に亡くなっている。

現在継続しているメンバーは把握しにくい。礼拝への出席者は、平均15人から20人である。この地域は、ネッド・T・マバンドル司祭の責任地域である。

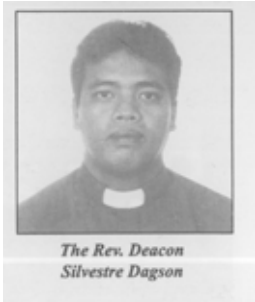
以上は、2002年発行の記念誌

PEARL FOR THE EPISCOPAL DIOCESE OF CENTRAL PHILIPPINES

からの抜粋翻訳です。(文責 小林史明)

今後の展望とお知らせ

1. シルベスター・ダグソン執事の来日



2002年のダグラス・ラブテン司祭、2003年のレオン・キヤドサップ司祭に続いて、今年の秋、9月27日(火)から10月11日(火)シルベスター・ダグソン執事が九州教区にやってきます。これまでのふたりの司祭

による交流の経験を活かして、もう少し突っ込んだ日本社会の中の聖公会の役割を、ダグソン執事と探っていくことを企画しようと思っています。

2. 第3回フィリピンワークキャンプ

今回のワークキャンプ中に、来年のキャンプのことが話題になりました。ネッド司祭が管理しているインファンタというルソン島東海岸の町がキャンプ候補地になっています。そして、キャンプの期間も2006年の3月上旬を考えています。11月頃になると具体的な内容が決まってゆきますが、皆さんも関心を持って、今から参加することを考えていただけないでしょうか。

次回のフィリピン協働委員会は、5月22日(日)を予定していますので、今回のキャンブレポートについての感想や質問、意見など、お寄せください。

連絡先は、

〒862-0956 熊本市水前寺公園28-14
熊本聖三一教会内 小林史明司祭宛
電話&ファックス 096-384-3202
携帯電話 090-1367-6818
E-mail f-frank@try-net.or.jp

フィリピンとの掛け橋は

インターネットで読めます。

この「フィリピンとの掛け橋」第7号は、次のアドレスで表示、印刷できます。各教会には1部配布しますが、必要ならそこからダウンロードしてください。

<http://www.try-net.or.jp/~f-frank/phi07.pdf>

キャンプスナップ



紙とセロテープとタコ糸だけでできる凧が、調子よくあがるので、子ども達が走り回っている。



食糧にするアヒルを殺している佐藤遼兄とネッド司祭



教会設計者のマーク兄(左)と家入貴裕兄